

(活動報告)

看護学生におけるエイジズムに関する文献検討

名和祥子¹⁾ 中野志保¹⁾ 樹神千尋¹⁾

I. はじめに

内閣府の平成 30 年度版高齢社会白書(2018)によると,日本の65歳以上の高齢者人口は3,515万人となり,高齢化率は日本総人口の27.7%に達した.したがって,高齢者人口の増大により,高齢者の医療・福祉に対する社会への需要は,ますます増加すると予測され,これから的高齢者看護を担う看護学生への期待は高まっている(畑野,2013).

看護者の倫理綱領(看護協会,2003)によると,「看護者は,人間の生命,人間としての尊厳及び権利を尊重する」と示されている.つまり,高齢者がどのような健康状態にあっても尊厳や権利は重要である.しかし,高齢者は,虚弱・疾患・寝たきり・認知症などにより,自己の権利を表明することが困難となり,尊厳や権利を侵害されることがある(奥野ら,2014).その要因として,堀内ら(2016)は,高齢者に対するエイジズムが存在すると述べている.そのため,高齢者に対するエイジズムの低減に努める必要がある.

エイジズム(Ageism)とは,「高齢であることを理由とする人々に対する系統的なステレオタイプ化と差別のプロセス」と,1969年に米国の精神科医 Robert N. Butler が定義している.

エイジズムのある看護は,高齢者の加齢により低下した機能や障害に焦点が当てられ,危険防止の策が重視され,その結果,高齢者の自立性や生活範囲が狭めてしまう(奥野ら,2014)と述べている.そのため,将来を担う看護学生が高齢者に対する正確な知識や理解を持ち,看護学生のエイジズムを低減していくことは,今後の高齢社会での看護の質を保証するために重要である(森ら,2017).

本学の老年看護学実習での実践の場は,高齢者を生活者として捉えることができるように介護老人保健施設が中心となっている.介護老人保健施設とは,高齢者の生活に目を向けて自立を支援し,リハビリテーションを行いながら在宅復帰を目指すための中間施設である.そのような高齢者の生活が重視される実習の中で,「高齢者に対してできる事がない」,「何を話せばいいかわからない」,「関わり方がわからないから話すことが怖い」,「認知症の方に話しても仕方がない」などの発言が見受けられた.これは,高齢者に対する看護学生の先入観や偏見,すなわちエイジズムが少なからず存在するのではないかと考えられる.

そこで,本研究では,看護学生のエイジズムを低減するための教育方法を検討するため,過去に行われた国内の看護学生を対象としたエイジズムに関する研究を概観することを目的とした.

II. 方法

文献検索は医学中央雑誌 Web 版 Ver.5 を用いて行った.“エイジズム”,“学生”のキーワードで検索し,看護分類・原著論文で絞り込むと23件の文献が抽出された.そのうち看護学生を対象としていない文献および文献検討を除く21件の文献を分析対象とした.分析はすべての対象文献を精読し,まず研究の動向を把握するために発表年代別の文献数を調べた.次に,エイジズムについて,どのような内容の調査がされているかを整理し分析した.

III. 倫理的配慮

対象文献の内容抽出の際には複数名で行い,論旨および文脈の意味内容を損ねないよう最大限配慮した.

1) 朝日大学保健医療学部看護学科(老年看護学)

IV. 結果

看護学生を対象としたエイジズムの研究は、2001～2017年の17年間で21件行われており、特に2011年以降から増加傾向にある（図1）。対象文献は、看護学生が抱く高齢者イメージについて調査した研究が3件、看護学生が抱くエイジズムを測定している研究が18件あった。それぞれについて以下に述べる。

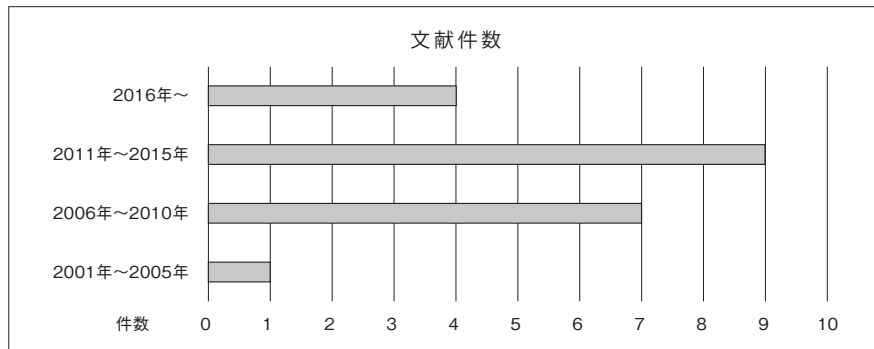


図1 発表年代別対象論文数の推移

1) 看護学生が抱く高齢者イメージについて

三澤ら（2006）は、高齢者のイメージを自記式質問紙で調査していた。その結果、看護学生は“足腰が弱い”，“しわ”，“老眼・難聴”など身体的健康に包括されるカテゴリーに高い値を示したことを報告している。また、岩崎ら（2016）の研究でも同様に、約4割の看護学生が“老いと不便”，“老いと病”などの老化による物事が出来なくなるというエイジズム的イメージを捉えていたと報告しており、加齢に伴う身体的変化を高齢者イメージとして捉えていた。しかし、一方で、半数以上の看護学生が、高齢者はゆとりを持ち自立し自分らしく生活しているサクセスフル・エイジング的イメージで捉えている（岩崎ら，2016）と述べており、高齢者のイメージを肯定的に捉えていた。

岩井（2010）は、看護学生の持つ高齢者のイメージを講義受講前後で調査していた。その結果、講義受講前の看護学生が持つ高齢者イメージは“病気になりやすい”，“けがをしやすい”，“体力の低下”などの加齢に伴う身体機能の低下というマイナスのイメージが多くみられた。しかし、講義受講後の調査では“知識が豊富”，“人生経験が豊富”，“趣味の時間が多い”など、生活面での肯定的なイメージを持つ看護学生が増えたことを明らかにしており、看護学生の知識取得によって、高齢者イメージに相違を生じていた。

2) 尺度を用いたエイジズムについて

尺度を用いて看護学生が抱くエイジズムを測定している文献は、18件あった。そのうち、日本語版 Fraboni エイジズム尺度（FSA）を使用している文献が15件、The Fact of Aging Quiz（FAQ）を使用している文献が3件あった。

日本語版 Fraboni エイジズム尺度（FSA）とは、Fraboni らによって開発された尺度（Fraboni M. et.al, 1990）をもとに、原田ら（2004）が開発した3つの下位概念「嫌悪・差別」，「回避」，「誹謗」を持ち、得点が高いほどエイジズムが高いと評価する尺度である。この尺度は、信頼性および妥当性は確保されている。FSAを使用している15件の文献のうち、FraboniのFSAを使用している文献が1件、FSA短縮版を使用している文献が14件あった。そのため、FraboniのFSAを使用している1件の文献は、他文献とエイジズム得点の比較ができなかった。また、FSA短縮版を使用している14件の文献のうち、4件法で回答している文献が4件、5件法で回答している文献が10件あった。FSA短縮版を開発した原田（2004）は5件法で尺度開発していたため、今回は5件法で回答していたFSA短縮版を使用していた10件の文献のFSA得点を比較した。

表1 文献一覧

著者	年	タイトル
森ら	2017	看護学生のエイジズムと、生活背景・老年看護学臨地実習における体験との関連
吉田ら	2017	看護学生のエイジズムに関する研究
森ら	2016	看護大学生の高齢者に対するエイジズムとイメージの変化 — チャレンジサイト活動による高齢者とのふれあい交流から —
岩崎ら	2016	看護学生の高齢者イメージ — 老年看護学概論の授業を通して明らかになった点 —
簗原ら	2015	ライフインタビュー体験の共有がもたらす効果： 高齢者イメージとエイジズムの関連からの考察
畑野ら	2014	高齢者の結晶性能力の受け止め方と看護学生のエイジズム及び高齢者イメージとの関連
簗原ら	2014	高齢者理解を目的としたライフインタビューの効果： エイジズムをアウトカムとした学びの分析
畑野ら	2013	高齢者看護学実習におけるライフインタビューと高齢者理解との関連： 高齢者イメージとエイジズムの変化の分析
久木原ら	2012	医学部生と看護学部生におけるエイジズム比較
林ら	2011	第1学年と第4学年の比較による 看護学生の高齢者に対するイメージと知識・理解、コミュニケーションの特徴
石倉ら	2011	看護学生の高齢者イメージとエイジズムに関する横断的調査
佐野ら	2011	看護学生のエイジズムと高齢者看護学実習との関連 — 病院実習と福祉施設実習の学習要素からの検討 —
佐野ら	2010a	看護学生の高齢者看護学実習前後のエイジズム変化について — 認知症高齢者看護の体験の有無による相違 —
佐野ら	2010b	看護学生の高齢者の知識の理解と看護の学びによるエイジズムの関連 — 高齢者看護学実習 I の学習効果 —
岩井	2010	看護学生の持つ高齢者イメージの分析
高野	2010	看護学生のエイジズムが老人とのコミュニケーション時の情緒状態に与える影響
前田ら	2009	看護学生の将来の高齢者ケア選択への関連要因
村田ら	2008	看護学生のエイジズムに関する要因 — 老年看護学概論および実習前後のエイジズムの変化 —
高野	2007	看護学生の背景による老人イメージ、知識、エイジズムの相違 — FAQ, FSA, SD 法を用いての分析 —
三澤ら	2006	看護学生がいだく高齢者イメージの分析 — 祖父母との同居が与える影響とエイジズムの視点 —
小川	2001	看護学生の高齢者へのエイジズム — 1年生と3年生のFAQの比較 —

看護学生の FSA 得点の平均合計は、「嫌悪・差別」9.49, 「回避」10.48, 「誹謗」7.50 であった (表 2)。また、対象者の学年を特定し調査した 6 文献の FSA 得点を比較すると、学年が上がるにつれ FSA 得点が低減していた (表 3)。つまり、高学年ほどエイジズムが低くなっていたことが分かる。

表 2 FSA 得点の比較

	嫌悪・差別	回避	誹謗
看護学生	9.49	10.48	7.50
若年男性	10.28	13.21	8.33

表 3 FSA 得点の学年別比較

学年 \ 下位尺度	嫌悪・差別	回避	誹謗
1 年生	10.15	11.40	7.50
2 年生	10.00	10.58	6.87
4 年生	9.35	10.40	6.55
全体	9.49	10.48	7.50

次に、The Fact of Aging Quiz (FAQ) を使用している文献は、E. B. Palmore が作成した The Fact of Aging Quiz (FAQ) 全 3 部 75 項目を小川 (2001) が検討した第 1 部の 25 項目のうち米国の状況を除いた 22 項目を使用していた。しかし、すべての文献で回答方法の選択にばらつきがあり、比較には至らなかった。

V. 考察

1) 看護学生の高齢者イメージについて

看護学生が抱く高齢者イメージの多くが、“足腰が弱い”、“老眼・難聴”、“病気になりやすい”、“けがをしやすい”など加齢に伴う身体的なイメージで、より細かく身体的な特徴を表現していた。これは、親近者的高齢者の有無にかかわらず、街頭などで高齢者を頻繁に目にする機会があり、看護学生の視覚的な情報として取得しやすいのではないかと考える。そのため、看護学生は加齢に伴う身体機能の低下というマイナスなイメージが高齢者の印象として結果に反映されたのではないかと考える。

一方で、高齢者の生活や心理状況に関するイメージ内容の表現はあまり見受けられなかった。これは、看護学生が過去に経験してきた高齢者との関わりの中で想起するものと考えられ、高齢者と接する機会の少ない看護学生は、高齢者の生活や心理状況を具体的に想像することが困難であると考えられる。先行研究では、看護学生が健康な高齢者と直接触れ合うことで高齢者に対する肯定的なイメージが生まれる (樋田ら, 2014) と述べている。つまり、講義や実習などで高齢者の生活や心理面を含めた特徴を学習することで、肯定的なイメージに変化したのではないだろうか。森ら (2016) によると、高齢者との交流体験から看護学生のエイジズムの一部を弱める効果があったことを報告しているため、講義や高齢者との交流は、エイジズムを低減させるために有効であるといえよう。本学においても、高齢者の肯定的なイメージが得られるよう地域の高齢者と関わる機会を、今後検討していく必要があると考える。

2) 看護学生の高齢者に対するエイジズム

看護学生の FSA 得点は、原田ら (2004) が調査した若年男性の FSA 得点よりも、全体に低い値を示していた。

つまり、看護学生は若年男性よりエイジズムが低いことを示しており、これは性差が影響している可能性が考えられる。杉井(2007)の研究でも、男性の方が女性よりもエイジズムを強く抱くことを明らかにしており、看護学生の大半は女性であることから、性差が関与した可能性が伺える。

また、FSA 得点の平均を概観すると、高学年になるほど得点が低くなっていることが分かった。つまり、高学年になるほど、実習等で高齢者との関わりが増え、エイジズムが低減している可能性が考えられる。しかし、吉田ら(2017)は、各学年間におけるFSA 得点や下位尺度での平均の差は認められなかったことを報告している。実際に、今回の学年別比較でも、得点差は1.0程度に留まっており、有意な差は認められていない。したがって、実習等で高齢者との関わりのみでは、エイジズムが低減するとは言えない可能性がある。樋口ら(2013)は、関わった高齢者の特性や看護学生との相互作用の質などが大きな影響要因となると述べている。そのため、高齢者との交流する機会を設けることに留まらず、学生自身が交流時の感情や気づき、学びなどを振り返る方法を検討することが重要であり、看護学生のエイジズムの低減に繋がるのではないかと考える。

VI. 結論

1. 多くの看護学生は、加齢に伴う具体的な身体的変化を高齢者イメージとして捉えていた。
2. FSA 得点は学年が上がるほど低減する傾向があった。
3. 看護学生が高齢者の肯定的なイメージを得られるよう、地域の高齢者と関わる機会を作ることを、今後検討していく必要がある。
4. 看護学生のエイジズムを低減するために、高齢者との交流する機会を設けることに留まらず、学生自身が交流時の感情や気づき、学びなどを振り返る方法を検討する必要がある。

本研究に関連して開示すべき利益相反関係にある企業はない。

VII. 文献

- Butler RN (1969) : Age-ism ; Another form of bigotry. The Gerontologist, 9, 243-246.
- Fraboni M. & Saltstone R. & Hughes S. (1990) : The Fraboni scale of ageism (FSA) ; An attempt at a more precise measure of ageism. Canadian Journal on Ageing, 9 (1) , 56-66.
- 原田謙 (2011) : エイジズム研究の動向と課題, 老年社会科学, 33 (1), 74-81.
- 原田謙・杉澤秀博・杉原陽子 他 (2004) : 日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成 — 都市部の若年男性におけるエイジズムの測定 —, 老年社会科学, 26 (3), 308-319.
- 畑野相子・簗原文子 (2014) : 高齢者の結晶性能力の受け止め方と看護学生のエイジズム及び高齢者イメージとの関連, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 12 (1), 35-39.
- 畑野相子・簗原文子 (2013) : 高齢者看護学実習におけるライフインタビューと高齢者理解との関連 — 高齢者イメージとエイジズムの変化の分析, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 11 (1), 23-27.
- 林綾乃・會田信子・杉浦伸一 (2011) : 第1学年と第4学年の比較による看護学生の高齢者に対するイメージと知識・理解, コミュニケーションの特徴, 日本看護医療学会雑誌, 13 (2), 45-55.
- 樋口友紀・福島昌子・竹渕由恵 他 (2013) : 看護基礎教育課程における看護学生の高齢者理解に関する研究の動向 — 2002年～2011年に発表された国内研究に焦点をあてて —, 群馬県立県民健康科学大学紀要, 8, 89-101.
- 石倉花奈子・古城幸子 (2011) : 看護学生の高齢者イメージとエイジズムに関する横断的調査, インターナショナル Nursing Care Research, 10 (3), 119-127.

- 岩井恵子 (2010) : 看護学生の持つ高齢者イメージの分析, 関西医療大学紀要, 4, 110-121.
- 岩崎裕子・市川光代・山田よしみ 他 (2016) : 看護学生の高齢者イメージ 老年看護学概論の授業を通して明らかになった点, 三育学院大学紀要, 8 (1), 27-34.
- 久木原博子・馬場才悟・藤田美貴 (2012) : 医学部生と看護学部生におけるエイジズム比較, 日本看護福祉学会誌, 17 (2), 93-104.
- 簗原文子・畑野相子, 岡美登里 (2015) : ライフインタビュー体験の共有がもたらす効果 高齢者イメージとエイジズムの観点からの考察, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 13 (1), 43-46.
- 簗原文子・畑野相子 (2014) : 高齢者理解を目的としたライフインタビューの効果 エイジズムをアウトカムとした学びの分析, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 12 (1), 27-30.
- 三澤久恵・佐野望 (2006) : 看護学生がいだく高齢者イメージの分析 祖父母との同居が与える影響とエイジズムの視点, 共立女子短期大学看護学科紀要, 1, 81-88.
- 森幸弘・福田峰子・飯盛茂子 他 (2017) : 看護学生のエイジズムと, 生活背景・老年看護学臨地実習における体験との関連, 日本ヒューマンヘルスケア学会誌, 2 (1), 35-44.
- 森幸弘・福田峰子・松田武美 (2017) : 看護大学生の高齢者に対するエイジズムとイメージの変化 チャレンジサイト活動による高齢者とのふれあい交流から, 中部大学生命健康科学研究所紀要, 13, 81-88.
- 村田日出子・小野田真弓・高野真由美 (2008) : 看護学生のエイジズムに関する要因 老年看護学概論および実習前後のエイジズムの変化, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 4, 12-17.
- 内閣府 平成 30 年度版高齢社会白書 (2018), <https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/index.html>, 最終閲覧日 2018 年 12 月 12 日.
- 日本看護協会 (2003) : 看護者の倫理綱領, https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/rinri/code_of_ethics.pdf, 最終閲覧日 2018 年 12 月 12 日.
- 小川妙子 (2001) : 看護学生へのエイジズム 1 年生と 3 年生の FAQ の比較, 順天堂医療短期大学紀要, 12, 35-45.
- 大淵律子 (1996) : 老人看護学実習での学び ―老人福祉施設実習から見た効果―, 東京都立医療技術短期大学紀要, 9, 157-167.
- 佐野望・檜原登志子 (2011) : 看護学生のエイジズムと高齢者看護学実習との関連 病院実習と福祉施設実習の学習要素からの検討, 共立女子短期大学看護学科紀要, 6, 1-10.
- 佐野望・檜原登志子・米良千代 (2011) : 看護学生の高齢者看護学実習前後のエイジズム変化について 認知症高齢者看護の体験の有無による相違, 日本看護協会論文集: 老年看護, 41, 164-167.
- 佐野望・檜原登志子・赤枝寛子 (2010) : 看護学生の高齢者の知識の理解と看護の学びによるエイジズムの関連 高齢者看護学実習 I の学習効果, 共立女子短期大学看護学科紀要, 5, 7-16.
- 杉井潤子 (2007) : なぜ高齢者を差別し虐待するのか, 老年社会科学, 28 (4), 545-551.
- 高橋順子・林裕子 (2009) : 老年看護学実習の初期における学生の困難 疾病や障害を持つ高齢者の自立に向けた観察の視点, 看護総合科学研究会誌, 11 (2), 15-23.
- 高野真由美 (2010) : 看護学生のエイジズムが老人とのコミュニケーション時の情緒状態に与える影響, 川崎市立看護短期大学紀要, 15 (1), 47-52.
- 高野真由美 (2008) : 看護学生の背景による老人イメージ, 知識, エイジズムの相違 FAQ, FSA, SD 法を用いての分析, 日本看護学会論文集: 看護教育, 38, 147-149.
- 樋田小百合・熊田ますみ・大瀧康平 他 (2014) : 健康高齢者との関わりによる看護学生の高齢者イメージ, 岐阜医療科学大学紀要, 8, 7-15.
- 吉田浩二・辻麻由美・原田文子 他 (2017) : 看護学生のエイジズムに関する研究, 保健学研究, 30, 39-46.